ポケットモンスター　Ｄｒｅａｍ　ｓｔｏｒｙ

アストン・ヴォルテクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　Ｄｒｅａｍ　ｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ２６３２Ｙ

【作者名】
アストン・ヴォルテクス

【あらすじ】
ポケモンを捕まえに行こうとしていた、アストン・ヴォルテクス。
そんな彼は、前日夢を見ていた。　それは、ポケモンになり、綺麗なお姉さんのポケモンになるという夢だった。　そして、その夢と似たような出来事が起こったのだった！　なんと、自分がポケモンになり、綺麗なお姉さんではなく、かわいい女の子のポケモンになったのだった。　これは、ポケモンになってしまったアストンとこの物語のヒロインのアストンの主人とその仲間達がポケモンリーグに挑戦するまでの物語である。　※作者の方は、必ず評価を

してくださいね！　正直にやってください！　これで、どこを直せばいいのか、多分少しは分かりますし。　そして、出来れば作者の方も読者の方も感想でも指摘とかしてください！　どこを直せばいいか詳しく分かりますから。　ご協力お願いします！　　では、コミカルでシリアスな「ポケットモンスター　Ｄｒｅａｍ　ｓｔｏｒｙ」へ、Ｌｅｔ’ｓ　ＧＯ！！！！！

主人との出会い（前書き）

相談に乗ってくれた方々、本当にありがとうございました！！！！！！

では、お待たせしました。

どうぞ！！！

主人との出会い

「ポケットモンスター」、縮めて「ポケモン」。これは、この世界にすむ、不思議な生き物である。そして、ここ、「オリジン地方」にある小さな町、「ムセシタウン」に一人の少年がいた。この少年の名は・・・

―――アストン・ヴォルテクス。

身長１５１センチでゼピア色の髪の毛（レブリアのほうは黄色）が特徴で、やけに長く、（一番長いので８５センチ）前髪が少々はねている。そして、赤をベースとした、帽子をかぶり、黄緑をベースとしたパーカー、そして、黒をベースとしたポケットがたくさんついているズボンをはいていた。このズボンは半ズボンにすることも可能で、パーカーにはお腹の辺りに大きなポケットが着いている。そして帽子は、この世界でポケモンを捕まえるのに必要な「モンスターボール」の絵が描いてある。

そして、彼は、家を出てポケモンを取りに行こうとした。したのだが。なんと、不思議な不思議な出来事が起こってしまった。それは・・・

―――自分自身がポケモンになってしまったのだった！！！

何故そうなったか。それには、ある原因があった。いやないと困る。マジで。理由は、１億２０００年前にさかのぼる。

??「生まれてねぇよ！！！」

失礼しました。１時間２０分前にさかのぼる。

??「どんだけ間違えてたんだよ!!!」

アストンは、それまで、夢を見ていました。とてもとても不可思議な出来事です。それは、自分がポケモンになって、それはそれはとても美しく、輝いていて優しくて、面倒見がよくてポケモンがとっても大好きな綺麗な綺麗なお姉さんトレーナーにつかまるという夢でした。一方、そのころ、アストンが寝ていると、アストンの周りを包むかのように、光が現れ、アストンの右手に変な紋章がつきました。この紋章こそがこうなってしまった原因です。

ちなみに、この紋章の効果は、この紋章を宿したものを、外に出た瞬間にポケモンにしてしまい、トレーナーに捕まえられ、トレーナーと一緒にポケモンリーグに挑戦し、見事全勝するまでは、絶対に元に戻らないという効果です。さぁ大変!アストンはどんなトレーナーに捕まり、どんな出会いがあり、どんな冒険になるのか、ドキドキワクワクなスーパーウルトラチョロチョロホイホイミラクルハイパー面白い冒険物語の始まりです!!!

あ、そうだ、サービスとして、ちょっとだけ話を進めてあげよう!

??「何がサービスだよ!」

お?ちょうどいいところに。皆様、この??こそが、この物語の主人公、アストン・ヴォルテクス君です!ささ、自己紹介自己紹介!!

アストン「お、おう。やぁ、俺はアストン・ヴォルテクスだ。綺麗なお姉さんが大・・」

はい、ありがとうございました～。では今から物語スタート！

アストン「ってちょっと待て！！？俺の自己紹介はまだおわって・・・って今から物語かよ！！もう始まってたんじゃないの！？さっきまでのは何だったの～！！！！！？」

・・・・・・

アストン「あれ？おっかしいな～。なんか人とか家とか、いつもよりでかく感じるぞ？それに・・・なんだこの状況・・・大勢の人が俺を囲んでるーっ！！！！！？」

アストン・ヴォルテクスは急展開にとても驚いていた。

アストン「いや、フルネームじゃなくていいから（汗）それにしても、どうして？何で？綺麗なお姉さん達は？」

アストンはそういいながら（周りにいる人たちには鳴き声にしか聞こえない）指を口にくわえていた。すると、なんといきなり大勢のかわいい子&綺麗なお姉さん達だけの女性陣が集まってきて、目をハートにしていた。

アストン「お？お？なんか結構いい感じ・・・でへへ（笑）」

アストンはそういいながら（周りにいる人たちには鳴き声にしか聞こえない）少々よだれをたらしてしまった。だが、しばらくすると、さっきまでいた大勢の人たちは全く別の方角へいってしまった。

アストンはあれ？という気持ちと、悲しい気持ちの両方の気持ちを持ちながら人盛りの多いところへ足を運んだ。運んだのだが。途中にあった水溜り（前日は大雨だった）が目に入ると、今まで以上

に驚いていた。

アストン「俺が・・・俺が・・・ヨーギラスになっちょるーーーっ！！！！！！？」

アストンはそういいながら（周りにいる人たちには鳴き声にしか聞こえない）体を後ろに引き（両手を後ろにやり、いかにも驚いているようなポーズ）驚いていた。

ちなみに、ヨーギラスとは、最初に言ったポケモンのことで、全身がほぼ黄緑色で出来ていて、お腹の辺りが赤、その周りに◆のマークが2つあり、頭にあるちょんまげ（とさか）がチャームポイント（多分）のポケモンだ。ちなみに、このポケモンの種類はいわはだポケモンで、タイプ（ポケモン全匹が持っているもの）はいわとじめんだ。

アストンは何がなんだか分からなくて、パニックになっていた。すると、いきなり右手が痛くなった。激痛だ。すると、後ろから女性の声が聞こえた。

??「チコ、つるのムチ！」

チコ（?）「チコ！」

アストン「なに！？うわーっ！？」

??「そのまま地面に叩きつけて！」

チコ（?）「チッコォ！」

アストン「ひでぶっ！」

??「よし！いっけー！！モンスターボール！！」

女性の声が、そういうとモンスターボールをアストンに投げてきた。アストンの頭にそれが当たると、アストンはその中に入った。

～モンスターボールの中～

アストン「何だろう・・・ここ・・・光が温かくて・・・いい気分になる・・・。ポケモンたちは皆、こんないいところに入れるんだな～」

アストンはそういいながら自分のことを考えた。

アストン「どうしてヨーギラスになっているんだろう？」

アストンがそんなことを考えていると、いきなり体が激しく動き、温かい光の中をあっちにいったりこっちにいったりと、ウロウロしていた。すると、いきなり光の中に何かの空間が現れ、アストンを吸い込み、そしてアストンがその中に入ると同時に空間も消えてしまった。

～ムセシタウン～

??「ヨーギラス！出ておいで！」

女性の声がそういうと、アストンはいつの間にかムセシタウンにいた。

アストン「あれ？ここどこ？」

??「あ・・・あ・・・しゃ・・・しゃべった!!?君、人間の言葉がしゃべれるの!!!?」

アストン「え!?え、なにこの展開!RPGでいうまさかの運命の出会い!!?っていうやつ!!」

??「ふふ、君って面白いね!ヨーギラスなのに。私はナツカっていうんだ。こっちは私のパートナーのチコリータでチコっていうの!」

チコ「チコ!」

チコリータというのもポケモンで、はっぱポケモン、タイプはくさだ。※ちなみに、自分はポケモンの鳴き声はあまり分からないので、俺のイメージでやっています。ちがっていても、文句は受け付けません!

アストン「お、おう!お、おれは・・・ア、アストン・・・ヴォ・・・ヴォルテクスだ!!」

アストンは照れながら、何とか自己紹介が出来た。

ナツカ「へぇ〜名前があるんだね〜ストーン・ボルテクスか〜」

アストン「それだと石になっちまうじゃねぇか!そんな名前じゃない!アストン・ヴォルテクス!!」

ナツカ「いい名前だね。よし!決めた!あなたのニックネームはボウちゃんね!」

アストン「俺はアストンだーーーーーーっ！！！！！！それに”ボ”じゃなくて”ヴォ”だし！！間違えるなし！！！」

ナツカ「私はあなたの主人だから、言うことは聞きなさい！！って、ちゃんと目を見て！？どこ向いてるの！」

アストン「よそ見してねぇし！！」

いや、アストンは余所見をしていた。そして、ナツカは余所見をしているアストンに注意をした。でもアストンはちゃんと前を向いていた。だが、それは悪魔で人から見れば。そう、アストンはヨーギラスでちっちゃくなったため、上を見るという習慣がなかったのだ。

もともと、アストンはニートだったため、自分より背の高い人を見るのは初めてだった。ちなみに、最初に家に出たときも実はいうと、足の数で大勢といったのだ。実はいうと、その周りにいたのは5人で、アストンは足を見て、一本の足＝一人の人間、と認識してしまったのだった。

アストンはナツカにいわれると、ゆっくりと上を向いた。すると、だんだんと顔が赤くなり、ついには上を向いたまま鼻血が出てしまった。なぜなら・・・

―――か、かわいい・・・／／／／

アストンは彼女の顔を見た瞬間にそう思った。そう、ナツカはめっちゃかわいい女の子だったのだ。きっと、この顔だったら、もうセクハラもされているだろうというほど可愛かった。

ちなみに、容姿は青い髪が肩辺りまであり、目は少々大きく胸も

結構大きくお腹はスッとなっていて、足が細くとても美しい足だった。そして、髪の毛には髪留めもつけている。
アストンは思った。
―――こんなかわいい子が俺の主人だなんて・・・なんて俺は幸せなんだ・・・!!、と。

ナツカ「ふふ！かわいい～ボウちゃん。よしよし。ほら見てチコ、新しい仲間よ～」

チコ「チッコ！」

ナツカはそういいながらアス・・・ボウを抱っこし・・・

ボウ「いやアストンでいいんだぞ!?つーか変えるの遅いぞ!!?ってかいつの間にかボウになってるし!!!」

全身が緑色で頭に大きな葉っぱをつけているポケモン、チコリータのチコにボウを近づけた。チコもとても喜んでいるらしく、その場でピョンピョン飛び跳ねていた。

ボウ（な、なんだこいつ（チコ）・・・かわいいじゃねぇかコノヤロー・・・／／／）

ボウはチコにも一目ぼれした。ちなみに、チコは♀（メス）である。

ナツカ「ボウちゃんはこれから私とこのチコと、これから仲間になるポケモンたちと一緒に、ポケモンリーグに行くんだよ？いい？」

ナツカは、抱っこしているボウにそう言い聞かせた。だが、ボウ

はナツカに抱っこされて変態モードを発動しているため、全然聞こえていなかった。
　ナツカもそれに気づかず、ルンルン気分のままモンスターボールに入れた。入れたのだが。突然モンスターボールからアス・・・ボウが出てきた。

ボウ「だからアストンでいいんだって！いちいち言い換えるな！っていうか早く名前をアストンに・・・」

　はいはい、今は小説ないだからちゃんと言うこと聞いて。じゃないと目玉をほじくるぞ～？

ボウ「モンスターボールの中、なんか変な感じがするんだよね。だから、モンスターボールに入れないで？（冷汗）」

（キラリッ）ボウはそういいながらナツカに抱きついた（足に）

ナツカ「え～？でも～チコもモンスターボールいやだって言うんだよね～・・・どうしよう・・・」

ボウ「そこを何とか！！」

ナツカ「・・・分かった。じゃあ、二人とも外に出ていいよ！でも、ボウちゃんは自力で歩いてね。チコはいつでも私に乗っていいよ」

ボウ「え？なんで俺はダメなの？」

ナツカ「だって・・・重いもん。７２ｋｇを抱っこできた私ってすごいと思わない？」

うん、すごいよ。とっても。もうまさにかい・・・なんでもないです。

こうして、この物語のヒロイン、ナツカと主人公ボウとその仲間達の冒険は始まったのであった。

主人との出会い（後書き）

あと、更新はカメレオンです。（＝超遅い）

ですが、どうかお読みいただければと思います！

よろしくお願いします！！！！

評価を必ず作者の人はやってね！！！！！！

ポケモンバトル！（前書き）

はい。ポケモンバトルです。

？？？「よ～ヨーギラス～」

お前はまだ出るな～！！！ドアホが！！

ポケモンバトル！

ボウ「そういえばさ。ナツカって何歳なの？」

ナツカ「８歳」

ボウ「へぇ～・・・ってうそおおおおおおおおおおおお！！！！？」

　ボウは旅に出てすぐから驚きの声を上げた。

ボウ「は・・・は・・・８！！！？嘘つくなよ！！！」

ナツカ「本当よ～！！本当に８歳よ！じゃあ聞くけど、ボウちゃんは何歳なの！？」

ボウ「お、俺！？俺は・・・その・・・えっと・・・あ、あれだ・・・（やべぇ・・・歳忘れた・・・）」

　ボウは、とんでもないことになってしまっていた。なんと、自分の歳を忘れてしまったのだった。これはとんでもない大失態！ボウはどうするのか！！？とそのときだった。

　ナツカの頭に何かが当たった。音はというと・・・

ヒューーーーーーーン・・・ドカーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！！！！！！！！

　という音だった。これにあたったナツカはなぜか小さいたんこぶだけですんでいた。今のは絶対にＢ○○が爆弾を落としたような音

だ。なのにたんこぶだけって・・・どゆこと！！？あ、失礼失礼。ついつい突っ込んでしもうた。

ナツカが、あたったところをなでながら後ろを向くと、そこには一匹のポケモンと見える物体と一人の少年が立っていた。

？？？「やーいやーい！！バカツバカツ！それにそんなバカツの相棒のチカンも一緒か！！あはははは！！！おや？もう一匹増えているようだね。まぁ、どちらにせよ、弱いポケモンだろ！」

？？？「ダン！ダーン！！！」

？？？「おお！そうかそうか！！”ダンバル”もそう思うか。あはははははは！！！！」

その少年は漆黒の黒髪に黒い帽子をかぶり、黒と黄緑をベースとしたジャケット、黒と水色をベースとしたポケットがたくさんついているズボン、そして、黒い革で出来た手袋をしていた。その隣には、青くて、鉄のようなもので出来ているポケモンてっきゅうポケモンのダンバルがいた。

ナツカ「あなたは・・・レツハ！」

レツハ「よっ！バカツ～。それと、チカンちゃん？」

レツハという少年はからかいながらナツカとチコの名前をわざと間違えて呼んでいた。

ナツカ「私はナツカ！！こっちはチコよ！もう間違えないでよ！！」

レツハ「はん！テメェなんか、一生バカツでいいんだよ！バカツ！

！」

ナツカ「何ですって～？もういっか・・」

ナツカが言葉を言おうとすると、いきなりチコがレツハに向かってつるのムチを仕掛けた。だが、それをダンバルが「とっしん」という技で跳ね返した。

チコは思い切りつるのムチを放ったのか、つるのムチはそう簡単にはとまらなかった。そして、あと少しチコにあたり、チコにダメージが来るというときだった。なんと、ボウがそのムチを喰らって、チコを守ったのだった。

ボウ「ステキなレディをいじめるなど・・・男として恥ずかしくないのか！！！」

ボウはレツハにそういった。そういったのだが。レツハには泣き声にしか聞こえない。だが、それをダンバルが勘違いし、自分に言っているのかというかのように、いきなりボウに突進を仕掛けた。すると、ボウの後ろからまたもやチコがつるのムチを放ち、今度はつるのムチをはじき、ダンバルをかく乱させた。

ボウが後ろを見ると、チコが笑顔を見せながらボウを見ていた。

ボウ（か、かわいいなコノヤロー！！！）

ボウはまたもやそう思っていた。そして、また前を向き始めると、前を向いたまま、ナツカにいった。

ボウ「ナツカ！あのレツハっていう人にポケモンバトルを申し込め！なんかちょっと頭にきたからさ！あいつ！」

ナツカ「で、でも・・・」

ナツカは戸惑っていた。何故だかしらないが。

ナツカ「どうせ、私なんか負けちゃうよ。だって、昔からレツハにいじめられていて、いっつも負けちゃうもん。3歳の時からチコと一緒だけど、チコもまだ幼いし・・・と言っても、このチコは3代目のチコなんだけど・・・」

ボウ「え？」

ナツカ「実は、このチコは3匹目のチコリータなの。一匹目は、レツハとレツハのダンバルにいじめられて死んじゃって、二匹目も、一匹目と同じでいじめられてこの子を産んだら死んじゃって・・・もし、また負けちゃったら今度はこの子が・・・！」

ナツカはそういいながらだんだんと涙があふれ出してきた。すると、ボウがまだ前を見ながらナツカに言った。

ボウ「大丈夫さ」

ナツカ「え？」

ボウ「大丈夫だっていってるの！チコは俺が守る！俺がいるさ！どうせあいつはあのダンバル一体だろ？今度は今日は俺をバトルに出してくれ！絶対にチコを傷つけさせないし、死なせたりもしない。俺があいつらをぶった切って、チコを守って、無事にナツカたちと一緒にポケモンリーグに行く！俺は、ボケでザコで泣き虫で弱虫だけど、男だ！男は、大事な人を守んなきゃいけないんだ！約束も守らなきゃ。俺は死んでもいい。でも、死ぬ前にお前達を守る。」

ボウはここまで言うと、ゆっくりとナツカの顔を見ながら、こう言った。

ボウ「約束だ！そして、俺は宣言する！絶対に、仲間を・・・大切なものを守ってみせる！！！」

ボウがそういうと、ナツカは涙を拭きながらうなずいた。そして、レツハを見るとこう言った。

ナツカ「レツハ！私はあなたに、ポケモンバトルを申し込む！！！受けてたちなさい！！！」

レツハ「はん！テメェなんか、また泣かしてやるよ！今日は、そのチカンちゃんと、ザコポケモンもぶっ殺してやる！！！行くぞダンバル！！！！今日は特別に1対2で勝負してやる。お前はそのチカンちゃんとザコポケモンを出していいぞ？あはははは！！」

ナツカ「いいわ。ただし、もし私が勝ったら・・・私の言うことを聞いてね！！」

レツハ「寝言はおねんねしてるときに言ってろや！！！ダンバル、とっしん！！」

ダンバル「ダーン！」

ナツカ「ボウちゃん！もうここはあなたの自由よ！！」

ナツカは、そう指示すると、チコを抱き上げた。そして、それと同時に、待ってました～！！といいながらボウがフィールドへ出た。

ボウ「へん！そんなとっしんしか能のないポケモンなど、ひねり潰してやるわ！！！喰らえ！”かみつく”！！」

ダンバル「ダン！？」

ボウはとっしんしてくるダンバルを口を大きくして待っていた。すると、それに勢いよく突っ込んできたダンバル。それをタイミングよく牙でかみついた。ダンバルはとっても硬かったが、負けず嫌いのボウ。全パワーを使って何とかダンバルにダメージを与えることは出来た。だが、ダンバルのとっしんの勢いが大きかったせいか、吹っ飛びながらでの攻撃だった。

ボウ「よっと！。りゅうのまい！！」

ボウはダンバルから距離を離すと、そこでりゅうのまいを踊った。それを計3回繰り返すと、ダンバルが要約とっしんしてきた。なぜか、もうダンバルは息が切れていた。多分、今までダメージを受けたことがなく、防ぎ方がよく分からずに大ダメージを負ってしまったのだろう。

ボウ「来たな！いわなだれ！そしてかみつく！！」

ボウはダンバルがとっしんしてくるのを待っていたかのように飛び上がり、いわなだれをおこして、ダンバルの道をふさぎ更にかみつくを行った。このいわなだれの効果は、ダメージを与えるためではなく、相手の勢いを最小限まで抑え、更にその勢いで岩にぶつかって防御を壊し、無防備の状態のダンバルに攻撃を仕掛けるという作戦だ。

ボウの作戦は見事決まった。ダンバルはボウの思うように動いて

いたのだった。
まず、岩にぶつかり勢いを落とし次に防御を壊し、なおかつダメージも受けていた。このダメージは岩にぶつかった痛さと、突進の勢いが強くて反動を受けたダメージだ。そして、岩をつっきると待っていたボウの口に入ると同時に、ボウがかみつき、ダメージを与えた。

ボウ「これで最後だ！！いやなおと攻撃！」

ボウは止めとしていやなおとを行った。本来、この効果は相手の防御を下げる効果だが、今のダンバルからの状態からすると、もうダメージといってもいいだろう。ダンバルは、このいやなおとを聞いて戦闘不能となった。
そう。ボウは、見事ポケモンバトルに勝利したのだった！

ポケモンバトル！（後書き）

う～い！次回は、さぁ、待ちに待ったレツハとレツハのダンバルをボコボコに・・・

レツハ「やめろおおおおおおおおお！！！！！」

ダンバル「ダンバーーーーール！！！！！」

フハハハハハハハ！！無様な！！さて、次回はなんとあそこへ！！

ナツカの願いと・・・（前書き）

今回はナツカの願いと、あそこへ行きます！

では～どうぞ！

（レツハが嫌いなあなた！もしかしたら今回でナツカも嫌いになってしまうかもしれないですよ。多分）

※残酷な要素が前半にありますので注意を！

ナツカの願いと・・・

ナツカ「それじゃあ・・・私のお願い聞いてくれる？」

レツハ「な、なんだよ・・・」

ナツカ「あの・・・友達になって！」

レツハ「はぁ！？」

ナツカのいきなりの言葉に、レツハは戸惑っていた。

ナツカ「チコを二匹も殺したのは許せない。多分、一生。でも、私に一番最初に話しかけてくれたのは、あなただった。そのとき、とっても嬉しかった。昔のあなたは、とっても優しくて、いつも手伝ってくれたけど、なぜか急に意地悪をし始めて、どうしたのだろうと思っていた。まぁ、私には友達がいない、特に、多分女子からは全員から嫌われている、男子からも遠ざかれる、でも最初に話しかけてくれたのはあなただった。それで、どうして変わってしまったのかが知りたいの。でも、中々いうときがなくて、そうこうしているうちにこんなことになってしまった。でも、友達になったら、話してくれるかなと思って・・・。あの・・・友達になってくれる？」

レツハ「・・・っ・・・」

レツハはうつむいたまま何もいわなかった。そして、ボウに蹴られているダンバルをモンスターボールに戻すと、石を持ち、そしていきなりナツカに投げた。それを見事キャッチしたボウ。そして、レツハは、ボウを見るとこう言った。

レツハ「俺なんかが友達になったって、多分いじめるとおもう。きっと、いや絶対嫌な気持ちになる。だから・・・お前の願いは聞けない・・・」

ナツカ「でも約束したじゃん！」

レツハ「だからっ！」

ナツカ「だからじゃない！男でしょ！！！？男なら・・・約束を守るって・・・守るってボウちゃんが言ってたもん！約束を守んない男なんて、男じゃない！」

レツハ「な・・・」

ナツカ「別に、なりたくなければそれでいいの。ただ・・・ちょっと知りたいの。何で人が変わっちゃったのか・・・。」

レツハ「それは・・・その・・・えっと・・・」

レツハは指いじりを始めて顔を赤らめた。

レツハ「その・・・か・・・かわいいから・・・」

ナツカ「え？」

レツハ「だ、だから！かわいいからだよ！お前が！！」

ナツカ「あ・・・」

ナツカはその言葉を耳にすると、体が固まった。

レツハ「かわいいと・・・なんか・・・いじめたくなるんだよ・・・。かわいいと・・・。お、お前はずるいんだ！まだ８歳なのにそんなスタイルで、性格も良くて！お前なんかまだいいほうさ・・・。お前は知らないだろうけど、俺のほうがずっと辛いさ！これを見ろ！！」

レツハはそういうと、上半身裸になり、背中を見せた。すると、ナツカたちは言葉を失った。その背中には、タバコを押し付けられた後が約１００以上あり、また刃物か何かで「レツハ死ね」や「レツハ殺す」など、レツハに対して脅し言葉や、あるところには、銃を撃たれたところもあった。そして、一番ひどかったのは、腰あたりのところの肉が剥ぎ取られていたことだった。

ナツカたちは、レツハの背中を見るといろいろな事が頭に思い浮かんだ。すると、レツハがなきながらいった。

レツハ「腰辺りにある傷は俺が２歳の時にやられたやつだ！俺は生まれてすぐに親から虐待をされ、周りの人たちからも嫌われ、時には暴力を振られ、一番悪いときなんか、裸で気温が－３０℃のところに半時間閉じ込められたこともあった！でも俺は、生きることに誇りを持ち、ずっと耐えてきた！でも・・・でもお前は違った。・・・いつも俺に笑顔を見せてくれた。そんな顔を見て嬉しかった。今思うと、とっても悪いことだが、きっとお前にも同じ苦痛を味わってもらいたかったんだと思う。それと、ずっとお前と二人きりでいたかったんだと思う。多分、お前が女子とか男子からいじめられるのは俺がいるせいだ。俺がお前のそばにいるから近寄らないんだ。俺さえいなければ、お前は有名人さ。何せ、最初からお前は親に恵まれ、お前は覚えてないかもしれないけど、たくさんの子供たちから囲まれていた。そんなお前に俺は・・・ほれたんだ。これが・・・

真実さ。本当はお前をいじめるつもりなんてなかったんだ・・・。本当は・・・。ごめん・・・。ごめんんん・・・・！！！」

レツハそういうと、地面に倒れこみ泣き叫んだ。すると、ナツカがゆっくりとレツハに近づきながらこう言った。

ナツカ「そうだったんだ・・・。ありがとう、レツハ。ごめんね、悪いことを思い出させちゃって・・・。私・・・あなたのことを全然知らなくて・・・。本当にごめんなさい！あの・・・私は別に嫌じゃないよ？むしろ、嬉しいよ、あなたと話せて。・・・友達になろ。レツハ」

ナツカはそういいながらレツハに手を差し伸べた。すると、チコがつるのムチでレツハの手を掴むと、ナツカの手に触れさせた。すると、ナツカはその手をギュッと握り締めて、レツハを起こした。そして、レツハの涙を拭くと、ジャケットなどを渡した。

レツハ「ありがとう・・・。俺は・・・やっぱり友達にはならない。お前だからこそ友達にはならない。それにもうお前には友達がいるじゃないか。2人も。それで十分さ。俺の夢は好きな女子が出来ることなんだ。昔の出来事が原因で、人も信じなかった俺に、好きな子が出来た。これはもう夢がかなったんだ。それで、その次の夢はその好きな女の子に幸せになってもらうこと。だから、俺はお前の友達にはならないし、もうこれからはお前には近づかない。一人でいや、ダンバルと一緒に、この世界を旅するよ。

ありがとう。ナツカ」

ナツカ「あ・・・初めて・・・ナツカって呼んでくれた・・・。ありがとう」

レツハ「べ、別に・・・／／／・・・それじゃあ・・・」

レツハはそういうと、静かに森の奥へと進んでいった。そして、ナツカは願った。いつかまた、レツハとあえるように、と。

「→ホグワシティ　↓ポケモンリーグ」という看板をナツカは見つけた。それを見たボウは目を輝かせていた。

ボウ「うわ～！ポケモンリーグ！ねぇねぇ！ここいこうよ！早速ポケモンリーグに挑戦できるよ！」

ナツカ「ちょっと待って！よく見てよ注意書きを。『ポケモンリーグにはジムバッジを計１６個集めてから挑むべし。１６個集めていないもの、入るべからず』って書いてあるよ。今私、バッジ１個も持ってないよ？」

ボウ「バッジ？なにそれおいしいの？」

ボウのバカさには本当にあきれる。ちなみに簡単に説明しておこう。ジムバッジとはジムに行ったらもらえるバッジだ。

ナツカ「ってちょっと待てーっ！それだと全然意味ないじゃん！もう！私が説明する！ジムバッジというのは、各地のシティやタウンにあるポケモンジムで、そこでポケモントレーナーは自分の実力を試すの。それで、そのポケモンジムには必ず一人はジムリーダーという人がいて、その人はそのジムで一番強い人なの。それで、その

ジムリーダーに勝てばジムバッジがもらえるの」

お～さすがナツカさん。詳しい～！！

ナツカ「いや、普通だけど・・・（汗）」

ボウ「しょんな～・・・ショック・・・」

ボウはすっかりご機嫌斜めだ。はい、ということで～・・・ご機嫌斜めのピ・チュ・ウ！！！

ナツカ「誰がピチューだよ！」

すると、そこへ、胸の背中に「R」の文字がついた服を着ている一人の女性と一人の男性、そして、Rはついていないが、その代わりに・・・ばけねこポケモンのニャースというポケモンがやってきた。

ナツカの願いと・・・（後書き）

は～い！さぁ、今回は前半はシリアスで皆さん大嫌いのレツハの過去話！それと後半（といっても短いが）は少しコミカルでした！

次回は、最後に出てきた3人（正式には2人と1匹）の正体が！

「R」の三人衆！（前書き）

はい！早速アニポケ（アニメポケモン）とコラボですよ。

今回はデュランダルさんには気づかれたあの三人衆の登場です！

で、短いです。

「R」の三人衆！

Rの女性「あぁ～今日もジャリボーイの”ピカチュウ”をゲットできなかった・・・何とかしなさいよ”コジロー”！」

Rの男性「そんな、俺に言われても～！！（泣）いたいいたい、叩くなよ”ムサシ”！」

ニャース「でも大丈夫ニャ！ニャアが付いてれば、必ずジャリボーイのピカチュウはゲットになるニャ！！」

胸と背中に「R」の付いた服を着た女性「ムサシ」と、胸と背中に「R」の付いた男性「コジロー」、ばけねこポケモンの「ニャース」は、そんなことを言いながらナツカたちのところへとやってきた。

このニャース、とっても珍しいポケモンのようだ。なぜなら、人間の言葉をしゃべることが可能なのだから！

ニャース「うるさいニャ！作者は黙ってるニャ！！！！喰らえ！みだれひっかきニャ！！ニャニャニャニャニャニャ！！」

うわ～いたいいたい、やめて～！！←顔が傷だらけ。

ナツカ「あら？あなた達は？もしかして、ポケモントレーナーですか！？なら、ポケモンバトルをしましょうよ！！」

ムサシ・コジロー・ニャース「え！？（ニャ！？）」

ナツカは、この三人衆（正確にいい言えば、二人衆と一匹）をポ

ケモントレーナーだと思い込み、バトルを仕掛けた。
だが、ムサシとコジローとニャースは、そんなことを無視して、ナツカのポケモン（チコだけ）を見て目を輝かせていた。
ボウ「って俺は！？」
　お前は視覚に入ってないからダーイジョーブ！
ボウ「大丈夫ちゃうわあああああああああああああああああああああ！！！！！！！」
チコ「チコ？」
　チコは、三人衆（正確にいい言えば、二人衆と一匹）にずっと見つめられて、やや引っ込み気味だった。
　だが、ナツカは頭に一個怒りマークをつけていた。
ナツカ「あの～早くやりましょうよ！2対2で！」
ムサシ「わ～かっわいい！！！ねぇねぇ、コジロー！あのチコリータをゲットしない！？」
コジロー「そうだな～！！かわいいし～きっとサカキ様も大喜びするだろう」
ニャース「それだけじゃニャイニャ！まず、ニャアたちがこのチコリータをゲットする。そして、アジトに持って帰ってサカキ様にあげる。そして、次の日に、サカキ様はパッと目を覚ます。すると、目の前にこのチコリータがいて、満面な笑顔で笑う。すると、サカ

キ様は朝から気分がよくなる。そして、ニャアたちにこう言うニャ。『お前達にはとても感謝しているニャ。こんなにかわいいチコリータをくれたのだからニャ。そういうお前達には褒美をやらねばならんニャ』とニャ！」

ムサシ「さっすがニャース！そうなれば・・・」

ムサシ・コジロー・ニャース「いい感じ～！」※アニポケでこう言うときにいつも言うセリフを忘れてしまったので、これだけです。誰か教えてくださーい！！！

ムサシとコジローとニャースはそんなことを言いながら、飛び跳ねていた。一方、ナツカというと・・・。頭に三十個怒りマークが付いていた。

ナツカ「いい加減に・・・しろやあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

ナツカはそういいながらそこら辺にあった大きな岩（全長５０センチ）を蹴っ飛ばした。

それを見たチコは怯えてボウに抱きつき、ボウはチコに抱き疲れたとたん、チコを抱きしめながら鼻血を出して気絶した（笑）

「R」の三人衆！（後書き）

次回、皆様も知っているあの人物が登場！！！

お楽しみに！！！

大大大人気の少年と大大大人気のポケモン（前書き）

よっしゃあ！行くＪ（ジェー）！！

ナツカ「・・・フフ・・・」←周りに黒いオーラがまとわり付く

怖いよ・・・ナツカ・・・

（書き方を一部変えました。）

大大大人気の少年と大大大人気のポケモン

ナツカ「もういいわ・・・こうなったら・・・。行きなさい！チコ！つるのムチ！！」

チコ「チッコ！」

チコはつるのムチでRの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）に攻撃を仕掛けた。Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）は、攻撃を喰らうとかなり吹っ飛んでしまった。

ムサシ「何で～」

コジロー「こんなことに～」

ニャース「なっちゃうのかニャ～・・・」

Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）「やな感じ～！！！！！」

Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）はそういいながら星となった（笑）

ナツカは、Rの三人衆（正式に言えば、Rの男女2人とニャース）が吹っ飛んでいくのを見ると、すぐにチコを褒めた。チコはまるで「褒めて褒めて！」というような感じで、ナツカに飛びつく。ナツカはそれを見事に抱きとめ、笑顔で優しくチコのはっぱをなでてあげた。

チコは、とても喜んでいるようだった。

ナツカ「よくやったわチコ！さすがチコね！さて、このヨーギラスはどうしましょう」

ナツカはそういいながら道端に鼻血を出してよだれもたれていて、顔がエロい顔になっている変なヨーギラスをにらみつけた。

すると、一瞬にして、ヨーギラスに寒気が走り、ヨーギラスを身震いさせた。と、そのとき、チコがナツカから離れると、ボウの横に立ち、優しくボウの顔（鼻）をなめた。するといきなりボウが立ち上がってチコを力強く抱きしめた。

ボウ「うおおおおおおおおおおおお！！！！！幸せだあああああああああ！！！！こんなかわいいポケモンに看病をしてもらうなんて！！もう、だめ・・・！」

ボウは、そういいながらチコを抱きしめたまままた倒れて気絶した。顔は先ほどにらみつけられる前と同じだ。

その姿を見て、ナツカはあきれた顔をし、チコは苦しそうな顔をしながら、つるのムチで素早く連続でボウのほっぺを叩いていた。そのとき、「パチンッ」といういい音があたりに響き渡っていた。

ナツカ「さて、いきましょうか」

ボウも起きたところで（ほっぺがかなり膨れていてフグのような感じだが（汗））、ナツカは目指していたポケモンリーグ・・・とみせかけホグワシティに向かった。

ナツカ「そういえばさ～・・・ボウちゃんって、なんで人間の言葉がしゃべれるの？」

ボウ「え？えーと・・・それは・・・その・・・」

困ったな～とボウは思った。自分は実は人間で、なぜかポケモンだったの！といえば疑われ、最悪の場合、嫌われてしまうかもしれないとボウは思っていた（いや、まず第一の声は「え！？」だと思うが・・・）。

ボウ「えーっと・・・な、何で・・・かなぁ・・・お、俺も・・・わかんないや！」

ボウは騙そうとした。だがバレた。

ナツカ「本当は人間だったんでしょ！だってよくあるもんそういうこと。私、前におばあちゃんの家で呼んだことがあるんだけど、「ポケモンはたまに人間の言葉がしゃべることがある。それは、人間がポケモンになったか、またはテレパシーの力を持っているかのどちらかである。だが、テレパシーはある特定のポケモンしか持っていない。普段身近に見るポケモンでしゃべるというポケモンは、ほとんどが人間からポケモンになったものだ。」って書いてあったもん。それで、ボウちゃんはよく身近に見るから・・・」

ボウ「いやヨーギラスそう簡単には見つかんないよ！？」

ナツカ「それがいるんだな～。この辺の近く・・・といってもホグワシティの先を行ったところなんだけど、そこにはなぜかしらないけど、よくヨーギラスが集まるのよ。だから、実はいうと、ホグワシティもヨーギラスを持っている人は多いのよね～」

ボウ「へぇ～・・・痛っ！・・・・ったく誰だよ～・・・・」

???P「ピカチュウウウウウ・・・」

???S「ピカチュウー！大丈夫か～！！？」

???M「サトシさ～ん！ここら辺は走ると危ないん・・」

???S「うわっ！・・・いつつつ・・・」

ナツカとボウ、チコ（チコはナツカの頭に寝転んで居眠りをしている）の前に、黄色いネズミのようなポケモンと、赤と黒で出来た帽子、青と黒でできたジャンパー、青と黒で出来たズボンをはいた美少年と、黄色の髪の毛で、右前の髪の毛が三つ網で、フードの付いた上から下までつながっている茶色っぽい色のローブを着て、銀色に輝く十字架のネックレスをつけた美少女がやってきて、ボウは黄色いネズミのようなポケモンとぶつかったのだ。

そして、美少年はナツカのまん前でズルッ！とガキンッ！とランランランとなってしまった（ズルッ！は滑った音で、ガキンッ！はどっかを打った音、ランランランは頭でひよこが踊っている（要するに気絶状態）のこと）。そこに、???Mが駆け寄る

???M「大丈夫ですか？サトシさん。ピカチュウ」

サトシ（？）「あ、ああ・・・大丈夫。ありがとう、ミネノ。大丈夫か？ピカチュウ」

ピカチュウ（？）「ピカピカ！！」

ミネノ（？）「ん？ああ！も、申し訳ございません！どうぞ！」

ミネノという美少女は、ナツカたちがそこで待っているのに気が付き、端によった。よったのだが。サトシという美少年はよらなかった。それをピカチュウというポケモンが一生懸命サトシに伝える。だが、一刻にサトシはナツカたちの存在に気が付かない。それにちょっと腹がたったのか、ボウがこう言った。

ボウ「おうおうおう！どきやがれってんだ！アストンさまのおとおりだぞ！！」

だがサトシたちには「ヨーヨーヨー」といっているようにしか聞こえていない。すると、サトシがこっち（といってもヨーギラスのボウにだけだが・・・）気が付いて、目を輝かせながらこう言った。

サトシ「コイツ・・・ヨーギラスじゃん！なんか懐かしいな～ヨーギラス・・・今、元気にしてるかな～・・・」

サトシは、空を見ながらそんなことを言っていた。すると・・・

サトシ「よし！お前とバトルだ！」

とまぁのんきなことをいっていた。すると、ようやくそこへナツカが割り込んできた。

ナツカ「あの～、そのヨーギラス、私のポケモンなんですけど。まぁ、バトルというのであれば、受けてたちますよ！」

サトシ「え！？そうなの！！？それじゃあ、バトルだ！！君に決めた！リザードン！」

リザードン「フンッ・・・！」

サトシ「リザードン～・・・（汗）」

～ナツカから見てのサトシのリザードン～

このリザードン・・・サトシって言う人にあまりなついてないのかな～。

終

すると、いきなりリザードンがボウにかえんほうしゃを仕掛けてきた。

ボウ、戦闘不能

サトシ「リザードン～・・・それは不意打ちだよ～（汗）」

そんなリザードンを見てサトシはあきれ、ミネノは苦笑い、ピカチュウはため息をしていて、ナツカは目を輝かせて、感動していた。

大大大人気の少年と大大大人気のポケモン（後書き）

さ～て、今回もまさかのアニメとコラボ～！ですが、サトシと動向をしていたあの美少女ミネノは俺のオリジナルキャラです。ちょっと作ってみました。

さて次回！

チコＶＳリザードン・・・なのですが・・・（汗）

なんと、またあいつら襲来！

Rの三人衆・改（前書き）

はい、あいつら登場！&かなり短い！

Rの三人衆・改

サトシ「さて、次はどんなポケモンだ？」

サトシは、あきれた時の汗を流しながらも、次のナツカのポケモンを期待した。ナツカは・・・

ナツカ「うわ～！あのリザードン、めっちゃ強い！しつけはあんまりなってないけど、すばやさといい、攻撃力といい・・・。これはやりがいがあるわ！よし！行きなさい！チコ！！」

チコ「チコォ・・・チコォ・・・チコ！？チ、チコ！！」

チコは、ぐっすり眠っていたが、ナツカのあるオーラを感じ取ったのか、目にも留まらぬ速さでフィールドへ出た。

ナツカ「チコ、たいあたり！」

チコ「チッコ！」

リザードン「グアァァァ！」

チコ「チコォォォォォ・・・」

チコは、リザードンの殺気を感じ取り、ピタッっととまってしまった。それを見たリザードンは一瞬にニヤリと笑みを浮かばせ、いきなりほのおのうずを放った。

炎の渦は、どんどんチコの周りを囲んでいく。更に、リザードン

は勢いよく、翼を羽ばたかせ、炎を強めた。炎はどんどん強さを増していく。そして、勢いよく翼を羽ばたかせた反動で空を飛び、空中から炎に向かって急降下していった。そして、炎のまん前に来ると、その周りをぐるぐると回るではないか。更に更に強さが増していった。と、そのときであった。

ウィーンガシャン！ウィーンガシャン！

何かがこちらへやってくる音がした。音からして、これは何かの機械のようだ。そして、その正体が現れた。その正体は、大きな大きな竜のようなポケモンの形をしたマシンだった。

ミネノ「これは・・・ボーマンダ？」

ミネノは、そのマシンを見て、ボーマンダといった。このマシンは、四本足で立っていて、背中には赤い大きな羽根、二本の角が生えていた。すると、いきなり、そのマシンの翼から大きな手のようなものが現れ、ほのおのうずを消して、チコを掴み、更にはリザードンをもつかみあげた。すると、口の中にその二匹を入れてしまった。

リザードンは必死にそのマシンにかえんほうしゃなどの攻撃をし、チコも必死に抵抗するが、全く歯が立たない。

サトシ「リザードン！っく、こうなったら、ピカチュウ！１０まんボルト！！」

ピカチュウ「ピカッ！ピ～カ～チューーーーウ！！！！」

ピカチュウは、体全身から強力な電撃、１０まんボルトを出すが、

それでもきかなかった。すると、そのマシンからある声が聞こえた。

???「ナ～ッハッハ～！！」

???A「全く貴様らの用心の無さにはあきれるね～！！」

???B「こいつらはニャアたちがもらってくニャ！おみゃーら（チコとリザードン）、早くお別れの言葉を言うニャ！別にいわなくてもいいがニャ～」

???C「さ～て！早くサカキ様に見せてあげないと！」

サトシ「何なんだお前達は！」

サトシがそういうと、その三人は待ってましたーっ！！とでもいうかのように、すぐにボーマンダの頭から現れた。そして、現れながら、こんなことをいっていた。

???A「お前達は何なんだ！という声を聞き」

???B「答えてあげるが世の情け」

???A「天から舞い降りし、輝くキューピット！」

???B「地から舞い降りし、情熱のキューピット！」

???A「ムサシ！」

???B「コジロー！」

???C「ニャース！」

ムサシ「我らロケット団の名にかけて」

コジロー「ホワイトホール、白い明日も待ってるぜ」

ニャース「にゃ～んてニャ！」

???D「ソーナンス！」

サトシ「ロケット団！」

ナツカ「あーーーーーーーーっ！！！！！あなた達は！！！！！！やっぱり・・・。やっぱりそうだったのね！私、知ってたんだから！あなた達とあって、一発で分かってたんだから！あなた達・・・。やっぱりポケモントレーナーだったのね！まちなさ～い！売られたバトルは買うってもんが常識でしょ！！！早くポケモンを出しなさい！私はチコでバトルするわ！」

　ナツカがそういったとたんに、全員がズルッとガキンッとランランラン状態に陥ってしまった。もちろん、ロケット団の3人（正式に言えば2人1匹）もである。

サトシ「違う違う！あいつらはロケット団っていうやつで、悪いものたちなんだ！」

ナツカ「そっちが2人なら、こっちだって！サトシ、やってくれるよね！」

サトシ「え！？い、いやだから！」

ナツカ「嫌とは言わせないわ！早くリザードンで応戦しなさい！チコ！はっぱカッター！」

ニャース「バカめ！このマシンはそんなものきかないニャ！これでも喰らうニャ！かえんほうしゃ！」

ニャースがそういいながらある赤いスイッチをおすと、ボーマンダのマシンの口からかえんほうしゃが出てきた。だが、そのかえんほうしゃもすぐに消えてしまった。

Rの三人衆・改（後書き）

次回！なんとあのポケモンが！

まさかのポケモン（前書き）

まさかですよ！？

まさかのポケモン

ミネノ「あ、危ない！」

ミネノがそういうともに、ナツカとサトシ、ミネノは目を瞑った。

だが、ある声が聞こえると共に、マシンが壊れる音がした。

???「エンテイ！かえんほうしゃ！」

エンテイ（？）「グオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォ！！」

???「フシギバナ、エナジボール！ボスゴドラ、もろはのずつき！！！！！」

フシギバナ（？）「バーナー！」

ボスゴドラ（？）「ボスゴォォォォォォォォォォ！！！！！」

突然、何者かがボーマンダのマシンに攻撃をしたのであった。

当然、マシンは壊れ、破壊される音が響いた。それと同時に、ロケット団の3人の叫び声も聞こえた。

ムサシ「うわうわうわうわ～！！！！・・・っててて・・・もう！こうなったらポケモン勝負！行きなさい！コロモリ！」

コジロー「よし、新しく捕まえたポケモン、いけ！ゴビット！」※

アニメでは違うと思います

コロモリ（？）「コロコロ！！」

ゴビット（？）「ゴビ！！」

　ムサシとコジローがそういいながらモンスターボールを投げると、一匹は顔が目がハートになっていて、一つしかなく、その周りにはモコモコした水色の毛のようなものがあり、その背中には黒い翼があるポケモン、コロモリとロボットのような形で、お腹の辺りには渦巻きの模様が書かれているポケモン、ゴビットというポケモンが出てきた。

ムサシ「コロモリ！フシギバナにエアカッター！」

コジロー「ゴビット！ボスゴドラにメガトンパンチ！」

ニャース「エンテイにみだれひっかきニャ！ニャニャニャニャニャニャ！！！」

？？？「エンテイ、かえんほうしゃ！フシギバナもう一度エナジーボール！その後にパワーウィップ！ボスゴドラ、もろはのずつきの後にアイアンテール！あなたたちは早く安全なところへ！」

　声の主はポケモンに指示をしていく中、ナツカたちに命令した。

すると、ミネノがこう言った。

ミネノ「分かりました。ありがとうございますタユキさん。さぁ、いきましょ」

サトシ「誰だ？」

タユキ（？）「俺はタユキ、ポケモントレーナーさ」

ミネノ「この人は・・・このオリジン地方のポケモンリーグのチャンピオンなのよ」

サトシ「え！？そうなの！？」

タユキ「まぁ、とにかくトレーナーさ。よし！そろそろかたをつけようか・・・。レントラー！かみなり！ウォーグルあばれる！サクラビス、ハイドロポンプ！！！」

レントラー「レーントラーッ！！レーーーーントラーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！！」

ウォーグル「ウォー！ウォーグル！！！」

サクラビス「サクー！サァクゥゥゥゥゥゥ！！」

コロモリ「コロ～」

ゴビット「ゴビ～・・・」

ムサシ「これって・・・」

コジロー「もしかして・・・」

ニャース「いつもの・・・」

ムサシ・コジロー・ニャース「やな感じ～！！！！！」

コロモリ「コ～～～～～～～～ロ～～～～！！」

ゴビット「ゴ～ッビットオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

　タユキのポケモンたちがムサシたちを攻撃すると、ムサシたちはいつもの言葉とともに星のかなたまで飛んでいった。

タユキ「ふぅ～。君たち、大丈夫？」

ミネノ「はい。ありがとうございます。タユキさん」

サトシ「ねぇねぇ！ポケモンバトル申し込んでもいいですか！？」

タユキ「ハハハハ。あ、あとでね。あとでやってあげるよ。今はちょっと忙しいから」

ナツカ「あの、どうもありがとうございました！そういえば、タユキさんって何歳なんですか？」

タユキ「１６だよ」

サトシ「へぇ～・・・ってえええええええええええええええええ！！！！！！！？」

ナツカ「じゅ、じゅうろく！！！！！？」

ミネノ「ちなみに、私は１２歳、サトシも１２歳です」

ナツカ・サトシ「え、えええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！？」

ミネノ「何でサトシさんまで驚くの・・・」

ミネノは、そう思いながら苦笑いをしていた。タユキもミネノの気持ちが分かったらしく、一緒に苦笑いをしていた。だが、彼女らはまだ、これから悲劇が起こるということを知らないでいたのだった。

まさかのポケモン（後書き）

次回、悲劇到来！

スラッシュ団　（前書き）

はい、悲劇が起きます・・・多分。

でも、その悲劇はミネノだけに・・・（汗）

ミネノ「・・・」←気絶状態

何故こうなのかは本編にて（汗）

スラッシュ団

ナツカ「あ！チコ！！」

ナツカはチコのことを思い出し、辺りを見た。サトシもリザードンのことを思い出し、辺りを見た。だが。二匹はどこにもいなかった。すると、エンテイがいきなりなき始めた。

エンテイ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

タユキ「どうした？・・・そうか分かった。ナツカちゃん、サトシ君、ミネノちゃん、ちょっと突いてきてくれ。３人もこのエンテイに乗るといい」

ミネノ「どこに行くんですか？」

ミネノが代表として、タユキに尋ねた。

タユキ「チコリータたちの居場所が分かったんだ。エンテイが探し出してくれた。さぁ行こう！」

タユキにいわれて、三人はエンテイの背中に乗った。ボウも目が覚めたらしく、エンテイの背中が気持ちくて温かいとのんきなことをいっていたが、チコがいないということに気がつきまた気絶してしまった。

タユキ「そのヨーギラスは面白いね。君の最初のポケモンかい？」

タユキはナツカに笑顔で質問した。

ナツカ「いえ、最初のポケモンはチコリータのチコです。まぁ、とはいっても、あのチコは三代目なのですが・・・。昔、友達・・・と私は思っている人とそのポケモンにいじめられてて、一代目のチコはその人とポケモンにいじめられて亡くなってしまって、二代目もあの子を産んだ後に一代目と同じようになってしまったんです。それで、三代目のチコと旅をし始めて、一番最初に捕まえたのがこのヨーギラスのボウちゃんなんです」

タユキ「そうだったのか・・・。すまない。悪い思い出を思い出させてしまって・・・」

ナツカ「いえ、大丈夫です。気にしないでください」

サトシ「そういえば、ナツカは何歳なんだ？」

サトシが今度はナツカに質問した。

ナツカ「私は８歳です」

ミネノ「え！？は、八歳！！！！？・・・」

ミネノはナツカの体と八歳という言葉を合わせていると、案の定ネガティブ状態になり、「負けた」だの「ありえない」だのとぶつぶつつぶやいていた。

サトシ「へぇ～８歳なんだ～。可愛いじゃん！」

サトシは笑顔でナツカにいった。ナツカは嬉しそうだったが、ミ

ネノからしては大ダメージだった。そして「私にはそんなこと言ってくれなかったのに・・・」とまたぶつぶつ言い出した。

タユキ「確かに、ちょっとロリコン的な感じになっちゃうけど、かわいいと思うよ。スタイルもいいし」

今度はタユキがミネノに大ダメージを与えた。逆にナツカは笑顔でご機嫌でもあった。ミネノはタユキの言葉をきくと「私はスタイルが良くないんだ・・・」とつぶやきながらエンテイの頭に倒れこんだ。（ミネノが一番先頭、その次にナツカで、サトシ、タユキという順番にエンテイの上に乗っている）

ミネノが倒れると、エンテイは少し後ろを見ながら「フゥ・・・」とため息をついていた。

タユキ「ここらしい・・・」

エンテイがとまり、タユキが指をさしながらいった場所には、「S」の文字がかかれている半円状の建物だった。今はもう夜で暗いため、Sの文字が書かれている半円状の建物は、窓から光が出ている。幸いなことに、建物の外には誰もいなかった。ちなみに、その建物がある場所は、奥深い森の中で、森の中はその建物の明かりとつきだけが照らしている。

四人はこっそりと窓から中をのぞいた。そこで見たものは、大きなカプセルの中に、チコとサトシのリザードンや、そのほかにた

くさんのポケモンが入っていて、その前には研究者や博士と見られる人、緑をベースとした服とズボンを着ていて、緑の帽子をかぶっている男性、緑をベースとしたへそが見える服とスカートをはいていて頭には小さい緑のハットをかぶっている女性がいた。そして、真ん中には、黄土色のロングヘアで黒い服の上にモコモコしているコートをはおり、長いブーツを履いている女性がいた。

タユキ「ここは、スラッシュ団の秘密基地のひとつでムツミが仕切っているのか・・・」

タユキは一人でそんなことを言っていた。先ほどからミネノのそばで伏せているエンテイもタユキを見た。

タユキ「君たちはここにいてくれ。すぐにあのポケモンたちは折り返すから。それと、警察も呼んで。エンテイ！行くぞ！」

タユキが小声でナツカたちにやることを言って、エンテイを呼ぶと、ナツカたちは小声で反論した。

ナツカ「嫌です！チコは私のポケモンで、きっと私を待ってます！」

サトシ「リザードンも同じです！」

エンテイ「ウオン・・・」

エンテイもナツカたちの言うとおりだ、とでも言うかのようにゆっくりとうなづきながらほえた。

タユキ「君たち・・・分かった。じゃあ、まずは警察を・・・」

タユキが携帯を取り出し、警察に伝えようとしたそのときだった。

???「そうはさせないぜ！」

???「私達が来たからには、あなた達はムツミさまに通報しなくてはね～」

ナツカ「誰！？」

突如現れた謎の者達に吃驚したのか、ナツカが代表として驚きながら尋ねた。

???「その言葉を待っていた！」

???「礼儀として答えよう！」

???「風のごとく素早く登場・・・」

???「雷のごとく素早く倒す・・・」

???「華麗なる踊り子”モエノ”」

???「燃え上がる情熱”ヨウジロウ”」

モエノ（？）「我らスラッシュ団の目の前に！」

ヨウジロウ（？）「立ちはだかるもの何も無し！」

タユキ「皆、行こう」

サトシ「はい」

ナツカ「分かりました」

突如現れたモエノと名乗る女とヨウジロウと名乗る男の自己紹介的なものを無視し、タユキたちは建物の中に入っていき、エンテイもぶつぶつ言いながら気絶しているミネノを背中に乗せるとタユキたちの後をついていった。

そして、その周りにはさむ～い風が吹いたという。

モエノ「あ、れ？」

ヨウジロウ「どう、して？」

モエノ・ヨウジロウ「いっちゃうの～！！！！！？」

２人が抱き合いながらそういうと、中からミネノを乗せているエンテイが現れ、２人にかえんほうしゃを放った。２人は泣き叫びながら星のかなたまで吹っ飛んでしまった。

スラッシュ団　（後書き）

はい・・・ミネノの悲劇でした（笑）

次回は、シリアスですね。多分。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2632y/

ポケットモンスター　Ｄｒｅａｍ　ｓｔｏｒｙ

2011年11月23日22時46分発行